



杏園間筆

卷一

特別
45
1415
1



門 45
號 1415
卷 1

杏園湖筆卷之一

韓使御筆在野士文

良所詩

伯樂詩

司農疏

魏崇詩

古今六集帖の序

あふきのしりしり

河橋文後記

あふきのしりしり

糸運の碑

江戸板橋

古今六集帖自跋

點狀集

おくさしりしり

李老老歌詩

達摩十年忌

屋比氏墓主の序

佐用軍記抄

蝦夷

雪考續集

大正中

鼎花

七嶋の序

唐の抄

平書抄

天竺の序

早稲田 大塚
25.11.10

加多屋心... 河橋大坂記の中

中古日本治亂記跋 大伏侍従少輔

怒火ノ下 書名

杏園詞筆卷之一

南畝子

浪華醫士

樋口道典公前傳納

信行上之官中言此

正騎艇格軍致傷於火藥者症情危重非但渠之身死
舟中人莫不危之而專賴

之下往來盼病隨症投葦以至於起死回生此外諸艇洛格中
病者亦多而并皆救護俱得復常一行上下孰不感歎

三使道到大坂聞此報俾即致謝而因行期卒迫未果遂即舉

行到鎮列後更為告達自

三行次各有所送深致報謝之意幸

足下領之

于漳朴僉知 ○

上上官 李深立僉知 □

大年洪僉知 ○

戊辰七月 日

浪華醫士樋口道與 公

正使道所送藥果伍之大口魚冬尾扇子貳黃羊

貳柄直墨貳笏

副使道所送扇子貳柄石魚貳束

從事道所送扇子貳柄石魚貳束

若了了之 延亨四戊辰夏四月通信使訖詞

朝鮮上之官書紙

樋口道與藤原清盛

道與子道泉孫嘉仙今漳縣後事云云

于戊六月十三日杉浦鏡西屋接來存年見示

○兩度芒鞋造赤壁亭高第切竹塔阪山花冉飄紅

兩巖行樹、映碧流、江上風清、還共通雲、間鶴去、挾誰遊、
雪堂老衲、情依旧、茶熟龍團、香暗浮、

辛卯三月朔

良所書

右岸汝裕諱序之所見、不知民所為何人、六月十一日

○浪良子博勞方町也、江戶子馬勞所也、按康輿字典

樂勞唐韻、魯刀切、音方、唐韻、伯樂、相馬、一作博勞、

博勞の字より、伯樂と博勞と、

○西朝詩別裁子先著遷夫、堰北水の跡を靴しの手

白き修堤築堰年、後年安得水底、倒行還上天、決口作

塞、口決明年再請司農錢、今の小吏の川、善後を

二修し

○梁田蛭巖自書詩

席上贈駿州白隱師

芙蓉峰上白雲飛、千里來臨赤石磯、落木天邊寒南浦

夕頓教鳧雁、共光輝

八十三翁蛭巖

題祇園寺海氏墨菊

菊品年々如揀瓜、只將肥大鬪豪華、僊毫写出赤心離

色抹殺人間爛熳花

蛭翁八十三書

贈岐阜山隱者

煖閣穿風擁錦裘、烹龍炮鳳酒如油、山中近日寒

甚深憶人間煙火不

說暖八十三書

甲辰元日作

使君在武昌東望想青陽邸牙雪霰色衣冠一葉蔭為
游龍橋上度吟鶴殿前翔千里行春令多風此意揚

詠錦

梁田邦義八十三書

將幣子純屬言若去之濃貝文春藻動聲彩晚霞重
金殿奪袍立仁閨歲字封何當驕冬日帰始故園松

暖八十三書

戲曲二首

今日遊多馬上羨公子冰靴後連錢正与僕歡似

昨款君何病莫是在平康君情不可隱君衣有別香

暖八十三書

書六張可以貼屏風或分為六幅亦無妨書封換示議價不底

卷亦返之可惜
六月幾日

○小漢侯酒井家所藏子澤衡家古今六集帖也所謂

六集也
篆隸部 賦部 詩部 文部

詠部 書部

○狩野家の名紙一泉州あり銅巻之狩野屋小七と

しよのちの子孫とありあり古江原所と云と字に

の通今に彼家子ありと
此田正樹
のちとありし

下
日録在

○所撰大坂記 二十卷

青徳院殿乃所撰ありて之林大守以信鳥乃序ありし
水戸家よりしりて林家よりしりて之

井上氏事記

○河州菅原川村を以て世を以て家名を以て軒号西瓜と
ありて之の父の西瓜と遠い形西瓜の如く色もまた瓜
汁の中を以て種もまた瓜汁の中

と世を以て家名を以て軒号を以て之を以て
吉年とて明和元年春凡十九年ありて之を以て
狭心山とて之を以て之を以て之を以て

とありて之を以て之を以て之を以て之を以て
池田氏事記

○江戸下板橋村に宗蓮寺とありて之を以て之を以て

文禄二癸巳年

本樹院殿前信州空山有賢禪定門

十一月二十一日

又曰曜寺子

光緒通照十方世界

應永二十五年

瑛妙禪屋

二月廿

念仏衆生扱取不

應仁元年丁元

妙性禪尼

十二月七日

此代弘賢寺所刻之碑也

○漢衛家古今六集帖

小漢侯所藏

篆隸部

趙孟頫殿心經

皇朝文廿八

夏禹

商書款識

□器款識

周石鼓文譜

秦泰山詔譜

巫咸朝那詔楚文

宣尼

史籍

李斯

岐陽石鼓

漢西京器□

三才原所合方

澠南尚方

秦書三函

封比干墓銅盤

秦刻之果

石趙鄴祠柱刻姚秦像銘

周乾豆陵騰碑蘇綽銘

魏梁鵠

宗資石獸

漢蔡中郎春九疑山碑

蔡邕

諸葛孔明

奇其避漢子昇

賦部

蘇子瞻行春歸去來兮辭

赤壁二賦

祝允明楊生秋軒賦及送別賦

王寵楊生赤壁賦

文徵明書會稽風俗賦

同人書民事書賦

同人生道東溪賦

周天球楊生晚香堂賦

趙孟頫行書送蘭賦

趙孟頫行書庭菊賦

文徵明小楷洛神賦

章草洛神賦 吳生手姓名氏

趙孟頫楷書七觀

王履吉楷書虛琴飯賦

蔡莊襄公文 吳生手姓名氏

晉王羲之草行書洛神賦

趙孟頫枯樹圖及賦

王履吉楷書拙政園賦

趙子昂前後赤壁賦

程應魁章草梅華賦

祝京兆草書月賦

詩部

文衡山少楷千文

蘇東坡集楊梅詩字作詩十首

文嘉懸磬室二十四詠并引

文衡山小楷敘古千文

王履吉書詩

文衡山周天球陸師道等劍石詩帖

唐柳公權春羣賢詩

枝山草書和陶飲酒十首

東坡草書醉翁操

樊上翁草書

李太白醉索

祝京兆草書歌

良河行書

文部

淹元

系道出尾
署曰系籍
甲寅揮月
中徵解為
孫塔朱世
程合時年
八十五

陸師道撰書張斯植傳

文衡山小楷封建論

寶晉齋法帖王逸少三喜亭帖

吳因管氏志心齋各觀音大士傳

范仲庵書伯夷傳

茂苑文志書張季柏傳

沛彭年春曾氏祠中記

祝希哲行書中記

文衡山小楷系道

文衡山小楷表忠觀碑

祝允明小楷吳郡沈氏良惠堂書

叙錄

文衡山小楷聖主得賢臣頌

祝允明小楷張公彦達造像贊

彭年小楷雪嶽張君傳

文衡山小楷唐子西園茶記

文衡山小楷杜牧園記

周天球小行心問

茂苑文志春雪樓張老小序

趙松雪行春道經

王錫爵春沈隱君傳

函園張翁像贊

李攀龍撰何良俊書 張氏忠傳

晉江蔡景明撰龍牧湖曲中記

王寵楷書石湖草堂記

祝允明撰春菊泉記

唐文皇哀冊褚遂良書

趙子昂行春道經

太原王錫爵撰書沈隱君傳

定武禊帖

蘭亭帖 二本

又二本

褚河南書三喜亭帖

趙魏公臨本三喜亭帖

李北海雪庵碑

董玄宰行春晉江謝氏新祠記

褚遂良黃帝陰符經

王履書畫山靜日長文

素師帖

唐釋懷素

永和帝選帖

誌部

沈庭訓小楷明經列大夫吳公行所碑

程應魁小楷恭簡歐陽公墓誌銘

吳可鑒小楷鶴亭蔡先生暨配葉安人墓誌銘

周天球小楷明故勅封太安人許氏墓志銘

文衡山小楷明故中順大夫嚴公墓誌銘

王錫爵小楷明故刑部尚書馮先生墓志

王穀祥小楷研山陳君墓志銘

文彭小楷楊嬪沈令人墓誌銘

同上郭母陳氏墓誌銘 文彭寫文衡山墓誌銘

嚴訥小楷都察使思賢王公墓誌銘

文衡山小楷少宗董公墓誌銘 周天球小楷章碩人墓誌銘

文嘉小楷 贈文林郎劉先生暨配封太孀人徐氏合葬墓誌銘

程應魁小楷冬政月川夏公墓誌銘

周天球小楷呂北野哀詞 張鳳翼小楷北野呂先生誄

明故羅隱君墓誌銘 莆田康大和撰吳郡彭年春

故張彥遠妻陳碩人墓誌銘 吳實撰黃姬水書

梧亭朱公暨配賈氏墓誌銘 王履吉墓志銘 文衡山撰著并春

研山從之府君行實

里人許知言
沈恒利

明朝羽大夫湖廣布政使司右參議龍濟忠公新所解

徐時行著
大京王

明故中順大夫鎮遠府知府嚴公墓志銘

明故勅封太安人徐女許氏墓志銘

明故中順大夫鎮遠府知府嚴公墓志銘

文徵明書

研山陳君墓志銘

王穀祥撰
并書

書部

沈度民則堂

郝峻

蘇洵

王珉

魏鍾繇

薛稷

王献之

歐陽詢

王僧虔

虞世南

褚遂良

魏崔浩

沈周

应祚

蘓軾

蘇子美

蔡襄

贡山谷

晋索靖

隋煬帝序曹子建帖

蔡京做刺使皇家春

蕭子雲

羊欣

王道子

王洽

晋张华

王衍、

劉弘、

王操之、

王濬之、

崔琰、

吳象象、

桓溫、

王珣、

郝愔、

郝景、

中宗元皇帝、

梁元皇帝、

王筠、

沈約、

祝弁、

陳主、

陳造、

辛文、

三、

王、

王徽之、

宋、

高宗皇帝、

宋、

開元皇帝、

宋明皇帝、

魏、

魏、

魏、

晉、

晉、

晉、

晉、

晉、

晉、

梁、

齊、

宋、

唐、

齊、

王右軍十七帖

張芝書

李武皇帝書

王羲之尺牘記

〇點鐵集序

新豐的骨梅山孫謀有一英衲人嚙頰唇記自稱藏
鷲雙壯象參扣諸家門庭之相院門自道其適
祥餘為初榜後字集古人語句自上下身韻造入
戶葉韻一韵之六少則三句五句多者二百句三
百句佛書祖錄二典三諫四書六經諸子之語

及六經唐宗之詩麻不括集就予寓斯集名且
諸序于其端 名之曰點鐵集也古逐韵集
句者五千二先生集韵有胡德宗吟料詩將斯集
之化不為三瘦 下寫

文明十七年乙巳端年

前建仁路平天臣史張澤

集中畧出知

文明十七年
乙巳明成化
二十一年也
引書者
圓機活法
可疑

傳 之 灯 温 也 統 一 得 灯 會 元 五 灯 合 元 普 一 灯 錄

雜 一 頌 集 禪 類 存 舟 類 聚 聖 一 山 石 集 又 天 一 眼 目

壇 六 祖 壇 經 心 一 宗 贊 六 門 一 空 六 門 集 虛 一 堂 錄

仿字序
主出

中、字錄 如淨天章如淨錄 自得淨慈自得暉錄 投錄投
子音錄 貞、和集 江、湖集 可集東山可集 泉龍泉錄
臨、濟錄 石、門文字禪 雲、菴錄 冥、山詩 從、容菴錄
習、林亦虛堂習聽 空、空谷錄 清、益錄 劫、真歇劫外錄
悟、真篇 出、適度出身傳 燈、信金、剛經注 法、華經
首、楞嚴經 僧、僧寶傳 珎、藏雙摘菁了、欲了菴 率、菴錄
羅、湖野錄 北、碣錄 山、菴 菴、菴錄 枯、崖漫錄 月、江錄
冷、齋夜話 僧、寶傳 林、間、錄 橋、州文集 載、佛祖通載
宗、鏡錄 編、年通論 百、川學海 莊、子 事、文類聚
論、語 杜、子美 坡、東坡 李、太白 谷、山谷 宋、詩選

才子作才詩
非

唐歸唐詩歸 古、歸 古詩歸 唐選 唐詩選 韓、文 析、文
唐合唐詩合選 唐吹唐詩鼓吹 格、詩格 白、白氏文集
學、詩學大成 圓、圓機活法 胡、曾 詩 楚、楚辭 離、騷 經、經
千家千家詩 選、文選 詩餘 詩餘便覽 錦、續段
体、三体詩 文前古文前集 文後古文後集 唐絕唐詩絕句
才、子傳 詩、毛詩 詩林 詩林廣記 歐、陽詩 旨、詩
文苑文苑英華 便、崇類編 會、韻會 府、韻府 珍、珠、囊
廣、韻 萬、法 詩山 押、韻 誠、揚 誠、全 翰、全 全
禮、記 詩、毛詩 剪、燈新話

毛詩言生

右居代氏所藏借以出也 七月初二

○かくこころの奥書

そとに九つ出くすの
注とあつていふことなり

あまの町いふはれあひのふし
光深丸也理と寛弘のけしき
出陣しあまの百斗あまの理とく
康永のけしき世の上のま
まのけしきあまの天のけしき
あまのまのまのまのまのまの
あまのまのまのまのまのまの
丸を申候入る御の御おれし
深き御理とすあまのまのまの
けしきあまのまのまのまのまの
らまのまのまのまのまのまの
と丸のけしきあまのまのまの

かくこころの奥書の
あまの町いふはれあひのふし
光深丸也理と寛弘のけしき
出陣しあまの百斗あまの理とく
康永のけしき世の上のま
まのけしきあまの天のけしき
あまのまのまのまのまのまの
あまのまのまのまのまのまの
丸を申候入る御の御おれし
深き御理とすあまのまのまの
けしきあまのまのまのまのまの
らまのまのまのまのまのまの
と丸のけしきあまのまのまの

七十一
名を
やうして
いふ
つ辰

幸地
今ノ車
ナルハシ

町に於て此の如きは又年のものなること
いふはつていふは例はありしに
ありしに

やうして信をせしむるに
此の如きは又年のものなること
いふはつていふは例はありしに
ありしに

七十二
今ノ車
ナルハシ

比叡の心のほそき
いふはつていふは例はありしに
ありしに

しつゝあやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
冬もくく茶の湯をのぎ茶の湯とあやうしうは保体
いづくまぬののあやめれ茶の湯あれののあやめれ茶の湯
のしつゝあやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
今春及草がオ子ののみまよとアアアアアアアアアアアア
の年あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
及草とあやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ちし平世の年あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
つらつらあやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
凡夫のあやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が
あやとんけりしと老よ人のころころあのみさ茶の湯が

丙
乙
このまのまの
つ辰

あつて

人々の心は... 又... 世... 相國寺の... ぼくは...

才百十九
満全の
後とて

て... 東坡山谷... 由己... 干... あり... あり... あり...

奥州の... 日... 吉新... 船... 肉... 代

ま... 奥州... 代... 船... 肉... 代

ら... 代... 船... 肉... 代

し... 代... 船... 肉... 代

いつくの女に方おきぬとあるのゆゑに... 勝るす

疾疾ニ... 非礼... のおま... あり人... 人... 冷夜... けり血...

ハロキ 十七名 廿七名 廿七名 廿七名

囚人の男... 命... 人... 後... 強... 物... さい...

井市幸成
為兼大納言
入左門
位

泥真
万年

〇
〇
〇
〇

いづらに... 御膳... 御膳...

草按二老の... 後醍醐天皇の御代に...

... 東使... 朝家...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

知

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

... 朝家の...

才高... 一年... 才の...

はなけえあけと自許しと老し切あゆむをばはなれ
まらうていふもめいしうまはる者の身はよきこゝろに
おのれさうちや可れ出の能くもよめを群衆とせりま
觀世又は今とていふはふんまはしとてはなれ
觀の音もつとてり子の影九品の道用及ぶるも
いふも久名の世はふんまはしとてはなれ
いはりわいふ教とていふもふんまはしとてはなれ
ものあつまいわい諸君またいふ人の體は下あつまはし
とていふもふんまはしとていふもふんまはしとてはなれ

大原のすけのりる小町。係紹巴とていふは
あつまいわい諸君の者と名をいふ中とていふは
中人とていふは源佐後の世にとていふは
はなれ人まはしとていふは名をいふ中とていふは
光景もはなれとていふは名をいふ中とていふは
いふは名をいふ中とていふは名をいふ中とていふは
いふは名をいふ中とていふは名をいふ中とていふは
いふは名をいふ中とていふは名をいふ中とていふは

謝女。雪世はなれとていふは名をいふ中とていふは
玉勉。雪と

ちかき事
は長年
可なり

ひきまゝに命の指針をいかにうつして今の行くべき道と
めをいかにして大原の山にたてまつりて経言のまゝの
まよりまゝにして世に傳ふに教旨をいかにし
るより西人のあはれにまゝにまゝに人のあはれにまゝに
とれよのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
涌きまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
世もまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
別人の世のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

世を動かす

オニを正に
の糸

たい

あつらひの末の世のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
世はまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
末の世のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
世はまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
あつらひのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

オニを正に
の糸

丹波の支那宛書并佐子と云々西綴の神々半らと云々
の申さるるいれりわく古程そは

○唐李長吉歌詩目錄

西泉吳 正子 箋註

須溪劉 辰翁 評點

右昌平坂學問所藏寫本有江雲潤樹印

此印弘文院春齋印也

李長吉詩集

明後學

徐渭文長甫批註
汪洪燁漪甫量訂

右予家所藏有天都查望于周氏序

按讀各敏求記

李賀歌詩編四卷集外詩一卷

宋京師本多後序此鮑欽止家本也臨安府棚前北睦
親坊南陳宅經籍鋪印

又吳西泉箋註本云李長吉詩旧藏京本蜀本會
稽本宣城本互有得失拙上堂鮑氏本詮次為勝

○群松有賴播揚少室之家風妙智多奇成純大
乘之根器

建曆千季忌之伏願之句也 大永五年 乙酉十月

吳西泉中序
昌平坂所藏
也

五日象山建仁月洲和尚杯

其廻向乃兵りくくくくくくくくくく

○曹全碑 字景完 中平二年十月丙辰トアリ

明趙岷、名号鶴羊、字執中、万曆年中

碑多れど、万曆中 魏碑ト云ふ中又顧炎武、全石文字

記、清鄭昌宗、金石史、字ト出たり 虛舟記跋

○各家隸萬家名義三十卷 弘治大所作

山陽必多山字の所名し、説又玉篇ト云く始一

終文ト云

○唐人小説 晋守符鈞臣藏書印あり

○六家文選 多福文庫の印あり五山の傍の印あり

皇朝嘉靖己酉春二月十六日三都汝南袁王製

題子正の題あり少濠あり、二臣以又選ト云

小異ト云

○揚州画舫録 儀徵 李斗著 一套

其の去 年二部アリト云

○困学记問の考、 關百詩先生勘本乾隆戊 あり

午春月馬氏禁唇樓校刊

宋王尚存厚齋先生困学記問二十卷、初錯校於

元大徳間明弘治万曆中俱有重刻本是書为
先生晚年所著令梓群籍穿穴坊論學者每苦
津逮之難茲以太原閻百詩徵君箋釋各條之
下又得長崎何義門學士校閱本暇日以大徳本
牙为勘對有文箋可兩存者並注於後因鳩工刻
置宗塾而証其顛末如此弘治戊午八月初門
馬曰璐書樓
○史鱗 万曆庚戌八月吉晋安泚摩湖識
右七行尾代氏より一足見 八月廿二日
○佐用軍記

仕字竹束念運テ寄傷ニ充信シタリ 急ニ攻又ハ蕪攻ニ

スルカ 紅葉ハ散過又太山ノ花見ニ便リトハ松マ楠柴

折焼テ互ニ寒氣ヲ凌春ニテ夏ニ長傳スルト云ヘシ 秀吉初

竹束ヲ並裏板ナト被キ 附捨ル仕字竹束ナト悉

焼タス不念念ノ任マナシ

○賑美ノ白トシクあり 是等ヲヤキヲ撰リ白ノ下ニ

あり後しハれハ貞轉トシテ傍ノ鳥金マナシ 上ノ鳥

タメのれをいふハ 又ツキナトシヨ臭トト斗 庚申

ニヤムトシカハトモト 廿二ノ年ハトアリトシヨ

此處ニ於テハトモト 此處ニ於テハトモト 此處ニ於テハトモト

○雪岑和尚續集

雪岑詩集本有十二巨編凡三千餘首止此選終以二百餘首竹溪林希逸序

春遊

芳菲何事思思、快與風光汗漫遊、萬物不如花、
一春唯看蝶、仙曾許我、黃金骨、天不饒君、白
雪頭、隨處是家、隨處有家、何處是家、

漁翁

歷盡江湖白髮深、生涯唯有一扁舟、醉來吹笛空沙
上、魚自忘忘水自流。

夜坐

寂寞燈光照夜窗、濕雲收盡月還涼、秋風不作東
歸夢、空山落葉響。

北移水泊

夜泊北橋楊柳汀、捲簾為枕夢魂清、
兩認作梧桐葉上聲。

十月廿

○太平吟云終、紅紫已成塵、布穀聲中夏令新、爽

路桑麻行不盡、始知身是太平人、此可謂善狀太平氣象
勝于誠多太平不在蒲韶裏、只在諸村打稻聲之句

浩然翁
雅談卷中

寧今承初夏還自派華道中自上毛高崎至武州悅然

桑麻光景、正如此待、所謂太平山、身親遇者 十月九日 雨日記

○城州八幡の瀬伽井坊より年々、淨れと致上り、心定花録

十世文と賜ありあり、草按、下學集云、最華 取一切草木 最初之華 献

神故云とあり、俗に初穂の字を角由ハ、梅子最花録と稱す

予古風ありきし 十月二十

○長瀨子手、岡野村、濯園、花抄、

おしあり

ふゆはまたきり

ゆきのうらみ

天きり、こころ

大シ

かきけ

○庄内物産 二巻 少寺文貞信正追加 二巻トナリ 庄内の地誌と

成り出りたるは、其の由とあり、その中、日夏、

同志茶話とあり、今、兵衛、女、

ありし 十月末 奥羽道程記 真人北峰記 日記

○奥羽のふるさと、其の東、

一里、上道と云、下る、

文明年中、
史記抄、
伊勢以四十八
町为一里

手の如き如き

○千代女との秘伝書、しきりて、火炒り

○礼儀類典 五百十卷

○群書一覽

第一書より才二百十四巻まで 年中行事

第二書より才四百八十四巻までの

内侍所御神乐 祈雨 止雨 臨時御講 河津御位

大嘗會 八十二巻 行幸 遷幸 遷宮 河元積

河津御位 立后 河産 女御入内 改元 天文客奏

講書 諸宣言 任大臣 上表 河亭 河津源

并明 总傳 五三續 四録 追討使 配流

河國忌 甚な儀例臨時の故宣旨とのせり

第四百八十五巻より第四百八十九巻まで 河津會

第四百九十巻より第四百九十六巻まで 河津會

第四百九十七巻より第五百十巻まで 三白聖 宴遊

河國忌 諒簡 等の事を執らる 群書一覽に出

○聖德太子傳唐 一卷 二本 平基親

一名東氏太子傳と云ふ者、平基親の著也、其書、今并

似聞、万葉傳、少々、本、新書、籍、自、撰、り、聖德太子傳、二巻、三、日本記

竟、富、子、而、徳、太子、の、傳、を、位、下、に、出、中、并、後、系、於、古、原、尹、於、言

佐、文、珥、保、敷、を、以、て、終、り、に、中、に、お、く、を、傳、傳、子、あり、古、書、と、し、て、

を、○多、田、孫、後、之、太子、傳、は、河、津、の、傳、橋、の、傳、天、王、寺、の、傳、と、し、

あり、太子、傳、三、箇、の、秘、文、を、云、箇、の、傳、と、し、て、又、三、箇、の、傳、を、箇、の

○群書一覽 六冊

享和元年 浪華屋崎 雅嘉著 大坂書林 新町西口小 濱町海部屋 定学堂 多田邸より 板

論十箇の紙の... 太子三論
 宗有り太子の御... 延長武...
 画... 太子...
 九年也

上巻 銘明天皇三十一年... 推古天皇十五年
 下巻 推古天皇十六年... 推古天皇元年

太子名... 太子信麿の古写本... 太子信麿卷上平氏獲... 太子名原戸...
 十四年... 十五年... 三年六月... 甲辰三月... 乙未... 丙午... 丁未...

太子信麿の古写本... 太子信麿卷上平氏獲... 太子名原戸... 太子名原戸...
 十四年... 十五年... 三年六月... 甲辰三月... 乙未... 丙午... 丁未... 戊午... 己未... 庚未... 辛未... 壬未... 癸未...

異国を訂り... 本之... 上下... 師...
 十月十日記

○惺々新刊抄 一巻 佐川田昌俊

惺々新刊抄ハ八幡の御物成に寄りて其の旨を記ししものなり
和州守の甲子に成りしものなり 寛永四年九月十日に成りしものなり
此の成りしものなり

○類傳明名録 十巻

香舟軒 箕山
古今名録の如く其の旨を記ししものなり 諸君の撰
りしものなり 大徳十八巻の如きなり 同居の出

○申齋隆徳及古撰子日朝山意林菴素心ハ大佛位十位

之節用集の如きなり 節用集古撰子日朝山意林菴素心ハ大佛位十位
明應五年五月三日と云々
花押ありト云々

○蒙古書臂鷹流 一巻 松田宗光

此の成りしものなり 蒙古の成りしものなり 松田宗光
の撰りしものなり 松田宗光の撰りしものなり 松田宗光の撰りしものなり

○貞徳文集 二巻

此の成りしものなり 貞徳の成りしものなり 貞徳の成りしものなり
貞徳の成りしものなり 貞徳の成りしものなり 貞徳の成りしものなり

○大日本史 二百四十六巻 西山公河内

第一巻より 帝王本紀 第七十四巻より 后妃列傳 八十六巻
第七十三巻より 諸臣列傳 一百七十九巻より 將軍列傳 九十九巻
列傳 一百七十九巻より 將軍列傳 九十九巻より 皇子列傳 一百一十九巻
一百七十九巻より 將軍列傳 九十九巻より 皇子列傳 一百一十九巻
一百七十九巻より 將軍列傳 九十九巻より 皇子列傳 一百一十九巻

家族列傳 一百九十二巻より 將軍家臣列傳 二百十四巻より 文学列傳 二百二十九巻
二百十三巻より 將軍家臣列傳 二百十四巻より 文学列傳 二百二十九巻
二百十三巻より 將軍家臣列傳 二百十四巻より 文学列傳 二百二十九巻

歌人列傳 二百二十三巻より 孝子列傳 二百二十四巻より 義烈列傳 二百二十五巻
二百二十三巻より 孝子列傳 二百二十四巻より 義烈列傳 二百二十五巻
二百二十三巻より 孝子列傳 二百二十四巻より 義烈列傳 二百二十五巻

列女列傳 二百二十六巻より 隱逸列傳 二百二十七巻より 方伎列傳 二百二十八巻より
二百二十六巻より 隱逸列傳 二百二十七巻より 方伎列傳 二百二十八巻より
二百二十六巻より 隱逸列傳 二百二十七巻より 方伎列傳 二百二十八巻より

叛臣列傳 二百三十一巻より 逆臣列傳 二百三十二巻より 外國列傳 二百三十三巻より
二百三十一巻より 逆臣列傳 二百三十二巻より 外國列傳 二百三十三巻より
二百三十一巻より 逆臣列傳 二百三十二巻より 外國列傳 二百三十三巻より

蒙古 明 新羅 高句麗 百濟 任那 耽羅 渤海 蝦夷 肅慎
吐火羅 舍祿 高句麗 百濟 任那 耽羅 渤海 蝦夷 肅慎
吐火羅 舍祿 高句麗 百濟 任那 耽羅 渤海 蝦夷 肅慎

以上群書
一覽表あり

享和五年十月十六日

○正保四年十月八日天海大伴号助官寛永二十年十月二日寂

○加茂清正肥後守封を以て河原守を攻むすはあはれ

茂原守家老新納武重新納知事として國界のものをいふ心

清正の偏見をよそにせよ洗池 茶

肥後の加茂がくもるも塩あゆ者なりたごきあけ

それらまうべからぬは首刀の刃玉物

梅乃心心を統のりしとて日本風土記鳥銃弾 俄

皮也皮也に於也とて其のこゝもあはれ

○大坂より河陣始事と記の年

天和初平陸奥守書上 先徳初平陸奥守事記

一 宇治守政宗江戸へあはれ別十のこゝに舟を出し、是は、

従来より河原守久保り公御宗友の移進 及び河原

守徳とて清正の御心とすは御宗友の御心とす

宗色御心より御宗親の御心とすは御宗友の御心とす

御心とすは御宗親の御心とすは御宗友の御心とす

徳心は河原守の御心とすは御宗親の御心とす

清正の御心とすは御宗親の御心とすは御宗友の御心とす

河原守徳心とすは御宗親の御心とすは御宗友の御心とす

つらき事なりと御恨み、京河原守の御心とす

又けりる海に 言はれ稱之島は友井島なるは世に事
に記さるる事 此の如くは 於此の如くは 此の如くは
山名をいふ事 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは

一 政宗海内と申す通う事 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは

天和片桐又七郎書上

片桐重正本多正純公に書状

一

此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは

此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは

十月十日

片桐重正

書状

天和初年陸奥守書上

初年陸奥守書上 此の如くは 此の如くは 此の如くは

此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは
此の如くは 此の如くは 此の如くは 此の如くは

心平一足少女之氣運下彈又主之氣運下
子以長以情：一別分如身一一新氣
以平古也大煩為其又極見海之境之極
了分及中極之極之之此之不平之極
張之極之何之之之之之之之之之之
之極之極之極之極之極之極之極之極之

十月九日

石田和泉

初生以後

人之心中

右行禮大後記卷九

○中古日本治亂記 八十五卷

跋

此記先年兼太閤秀吉卿之今執筆山中山城
正信普賢諸家年譜并國郡傳記系系
其室未成秀吉心一盡其極之未備公係有山中
之手其間平潛勸而令加之之石田逆亂則子
其部族如洞藏山中之家于此有年矣山中
其去之前知息早世其後嗣依其言送之其
相傳之趣如此

于時慶長十年乙巳晚夏。大田和泉書資方書

如月貞治壬寅至慶長辛丑二百廿五年ノ

証ナリ

壬戌七月ノ記

○新古今集

ヤシキリノ山ノ中ニ入リテ

汪國公評

山中ノ中ニ入リテ花ヲ見ル

○距吾村西北十三里許有村曰倭鄉乃利根郡也民家數十戶北藩諸侯遊戰之驛路也土人有一恠寡婦年八十一俄然衣上發火遍体燔之遽撲滅之其燄僅如星如是者屢或自背上或自胷下其火然身体多一燂痕觀者皆驚恠一日其火將燒厠老婦患之剃髮為尼入佛寺其怪少息數日後偶得家其火大發民家二十餘罹災於是住寺作一室於野處置之云土人云老婦少時美貌極多淫以故父与夫俱为人所殺其幸未發覺陰戮之罪受責於天者實享和泥元之冬也按是怪非冤鬼之所作則是老狐狸之所為者耶而希世之異未聞也余

親得之其材人乃記備忽忘

上毛車郡澁川 岸奉明稿

覃按清櫟下老人因樹屋昏影云曲周陳公令
桐言其邑富翁子婦自父家還以白僧鉢不復
起家人呼之不应扶户而入烟撲鼻如磁笑就床
視之衾半焦火燥之有孔二体俱焚惟一足在火
之焚人理殊不可解王虛舟曰焚砂石为龍火焚
金錢为佛火焚人之火是为慾火佛言媼習交接
斃于相磨研磨不休如是故有大猛火光于中斃
動意其研磨之極慾火熾煽而忽焰遂以自焚

其不焚床茅庐舍者火生于慾異于常火亦如龍
火止焚砂石佛火止焚金錢陳公諱于階今上毛
老婦火斃于身而不焚身災及民家最可怪已

壬戌七月初四借抄岸氏文于鈴木恭宗望早閱昏影題以教語 杏花園

○文与可丹洞集 雪濤集 馮用益北海集

○神道名目類聚抄

六卷

元龜己卯六月城西地及是日自序

正德四年正月

才一卷 才二卷 才三卷 才四卷 才五卷 才六卷
才一卷 才二卷 才三卷 才四卷 才五卷 才六卷
才一卷 才二卷 才三卷 才四卷 才五卷 才六卷

○古今神学類聚抄

百卷 此書石卷中

神國篇 六卷 亦名 五卷 神階 七卷

諸書三卷 及物部四卷 已上三十三卷 正法寺言部之類 其外其餘六十七
卷 寫物之類也

○勢徳通 五井紙頭 写本 五十卷 二十六分 林宗二

○ほろくのま子 一巻 以馬ノ人 一名堂以馬 写本 六卷 蓮心知士

○古今游名山總録 括蒼 何鑑 振仰甫輯

三世貞序 戸陵 呂炳用 晦甫 校三 兼葭 卷

○玉芝堂談薈 姑茂 徐應秋 君義甫輯

此書二十年のうちに 写し 畢き 今 漢書 兼葭 卷 去 辛酉 十二月 乙未 月 廿五日 兼葭 卷 一 廿二 今 其 字 少 あり

○琉球地物志 坂上登 随観 写本 後 友 聖 書 同 上 紙 書 中

此書
上へ上りて

享和二年壬戌六月十三日 起

十一月 終



